

## 令和2年度第2回輪之内町総合教育会議

日時：令和3年2月3日

19時00分～

場所：輪之内町立図書館

2階視聴覚室

1. 町長挨拶

2. 教育長挨拶

3. 議事録署名者の選出

4. 協議事項等

(1) G I G Aスクール構想の実現に向けた学びの保障について

(2) 中学生防災士資格取得者の地域自主防災組織への参画の仕組みについて

(3) その他

### 輪之内町総合教育会議委員

町長	木野隆之	教育長	箕浦靖男
教育委員会委員 (教育長職務代理者)	田中俊弘	教育委員会委員	市橋修
教育委員会委員	市橋肇	教育委員会委員	浅野千代子

### 輪之内町総合教育会議事務局

教育委員会 教育課長	野村みどり	教育委員会 教育課調査官	松井均
教育委員会 主任指導主事	北嶋盛久	教育委員会 主任指導主事	加納隆生
参事兼総務課長	荒川浩	総務課長補佐	岩田好弘
教育委員会 ICT教育指導員	長屋英人		

(午後 6 時55分 開会)

○荒川参事兼総務課長 皆さん、改めましてこんばんは。

本日は、第2回の輪之内町総合教育会議ということで御案内申し上げましたところ、1日のお仕事を終えられまして大変お疲れのところ、また夜分お出かけいただきましてありがとうございます。

それでは、ただいまより総合教育会議のほうを開始させていただきます。

開催に当たりまして、町長より御挨拶を申し上げます。

---

## 1. 町長挨拶

○木野委員 改めまして、皆さんこんばんは。

第2回の総合教育会議ということでお集まりをいただきました。本当にありがとうございます。

残念ながら、なかなかコロナが終息しないという状況の中でございます。

今日は、机の上にタブレットが各自1台ずつありますので、これを子供に使ってもらう前に、自分たちがまずはやってみようやという部分がございます。子供が1人1台ずつ持つこととなりますので、とにかくこれが身近なものにならないと意味がないということだと思っております。そういう意味で、せっかくの機会でございますので、またひとつベテランの方々もちょっと手ほどきを受けながらやってみたいかなと、そんなことを思っております。

まずそれと、あと2つ目の議題としては防災士の状況、これを中学の先生方にも大変お世話になって養成をしておるところでございますが、じゃあこれをこれから今後輪之内の行政と連携しどうやって生かしていこうかということもテーマになろうかと思えます。ちょうど今、関連して消防団、それから女性防火クラブの在り方についてもいろいろと検討しておりまして、またその体制についても新年度から新たな展開をしようと、そんなふうに思っておりますので、そういう意味で、防災士という資格をお持ちの方が主体的にどんな形でいろんな災害に対応していただけるのかということをもまさに問われているんだろうと、そんなふうに思っております。そういう意味で、大きなテーマでもございますので、どうぞひとつよろしく願いいたします。

そんな長い時間じゃありませんけれども、ひとつ中身の濃い議論を展開できたらうれしいなと、そんなふうに思っております。どうぞよろしく願いします。

○荒川参事兼総務課長 ありがとうございます。

---

## 2. 教育長挨拶

○荒川参事兼総務課長 続いて、教育長、お願いします。

○箕浦委員　こんばんは。

本当に夜分お忙しいところ御出席いただきましてありがとうございます。

1月21日に、県の教育長会長よりコロナ対策につきまして、県の総合教育会議が開催されたときの内容を、メールで各教育委員会のほうへ送っていただきました。

その中で、学校にまだ今のところクラスターというのはあまり出ておりませんが、やはりどこかに対応の隙があるからクラスターとか感染者が出るというようなことで、一人一人が隙をつくらないように対応をきちんとしておけば感染者が出ないというようなこともその会議で出たということが書いてありました。今日も校長会がありまして、コロナ対策につきまして再度確認をしました。

それで、今日の校長会で、この3月に行われます町内の卒業式につきましてちょっと話題にしまして、今年度この3月も去年の3月のときに行いましたように規模を縮小して行くというふうに一応確認をしました。来賓の方は今回の卒業式はなしということと、合唱とかも、例えば仁木小学校でいいますと卒業式が終わった後に合唱をビデオに撮ったのを見ていただくとか、福東小学校でいいますと卒業式の後に合唱を行うとか、大藪小は式の中で合唱を行うと、それぞれ対策を工夫しながら卒業式を行っていきたいと思っております。

それから、新聞等で今出ております35人学級の件ですけど、令和3年度から、岐阜県は小学校は1年生から3年生まで現在35人学級で、中学校1年生も35人学級で、3年度は今度は4年生を対象に35人学級にしていきたいというような、今、案を県のほうが練っておるようです。ただ予算がそれに伴いつくかどうかということがちょっとありますので、現在少人数学級で加配がありますので、その分が35人学級の新しいほうに回る可能性もあるというようなことで、この前、教育長会でその話が出ました。

それから、4年度からは、小学校の5年生と6年生、教科担任制が実施されるというようなことで、それも今後検討して進めていきたいと思っております。

以上ですが、どうぞよろしくお願ひします。

○荒川参事兼総務課長　ありがとうございました。

---

### 3. 議事録署名者の選出

○荒川参事兼総務課長　それでは、次第の3番目、議事録署名者の選出についてですが、これは私から指名させていただいてよろしいですか。

(「異議ありません」と呼ぶ者あり)

○荒川参事兼総務課長　それでは、田中俊弘委員さんと市橋肇委員さんをお願いします。

---

#### 4. 協議事項等

○荒川参事兼総務課長 それでは、4番、早速協議事項に入らせていただきます。

まず、1番、G I G Aスクール構想の実現に向けた学びの保障についてということをお願いいたします。

○北嶋教育委員会主任指導主事 よろしくお願ひいたします。

前回の総合教育会議のときには、輪之内町のG I G Aスクール構想について、計画あるいはどんな機器を配備していただいたかということについてお話をさせていただきまして、それについて御意見をたくさんいただきました。

今日は、実際にその機器をどう使って、どう授業に生かしているのか、はたまたこの先どんなことができそうなのかといったところを体験も交えながらお話しさせていただこうというふうに思っております。

紙面のほう、レジュメのほうを配らせていただきましたが、これに沿ってお話しさせていただきます。

1つ目、Z o o mの活用についてです。

こちらのほうは、もう皆さん御存じのとおり、テレビ会議システムでございます。実際に、休校中、小学校6年生や中学校3年生を対象に、Z o o mを使ったテレビ会議の授業を行うことができました。そのほか、オンライン修学旅行とあって、京都の人力車の会社と各学校を結んで、修学旅行に行ったというような経験をするようなことにも使いました。そのほか、研修会もZ o o mを使ってやっていることもありますし、不登校の子との対面などにもZ o o mを使ったりするというのもやっております。

モバイルルーターやZ o o mの無制限のライセンスのほうも各学校の配備も進んでいるところですので、今後もどんどん活用をしていきたいというふうに思っています。

また、1人1台端末を今持ち帰って、家のW i - F iに接続して、そしてZ o o mも学校とできるかという接続のテストもしているところです。

一番下の星印のところに、1人1台タブレット端末の家庭での利用の見通しというところがございますけれども、今年度3学期中に一度持ち帰って、各家庭のW i - F iにつながるかどうかを確かめ、そしてZ o o mもできるかということを確認して、来年度、まずは1学期は学校でドリルのソフトであったりとか、G-Suiteであったりとかをとにかく学校でなれ親しんで、そして夏頃から家庭に持ち帰って、家庭学習等に使うていくというような大きな見通しを持っているところです。

では、2つ目、SKYMENU CLASSについて、これは皆さんに体験をしていただこうというふうに思います。

このSKYMENU CLASSというソフトは、授業支援ソフトです。授業の中で、画面をみんなで共有して、考えとか作品をみんなで見合ったりするというようなことに主に使っていく機能です。

この端末にも入っていますので、投影というボタンを押すと、大画面につながって、提示できます。今日は私が先生になって、皆さんは子供になって、ちょっと体験していただこうと思います。

では、端末をちょっと触りながら一緒にやってください。

(事務局の説明に沿ってSKYMENU CLASS操作)

**○北嶋教育委員会主任指導主事** このSKYMENUという機能を使って、授業の中で1人1台端末を先生たちも今既にこういうのもどンドンやってみえます。

では、この後、G-Suiteという機能もありますので、今日、ICT指導員の長屋先生に来ていただきましたので、長屋先生のほうから説明したいと思います。お願いします。

**○長屋教育委員会ICT教育指導員** 皆さん、こんばんは。

今年度から教育委員会の補助をお世話になっております。よろしくお願いします。

私のほうからは、G-Suite for Educationと、それからプログラミングについてちょっとお話をしたいと思います。

ちょっと今、北嶋主任指導主事が主に授業で使うツールについて説明をさせていただきましたが、私のほうからは、学校と家庭と分け隔てなくというか、シームレスに使える、そういうツールとしてのG-Suite for Educationについての説明をさせていただきます。

私のほうは、ちょっと実習とかはありませんので手を動かすことはないんですけど、頭を動かしていただいて御参加いただければと思います。よろしくお願いします。

G-Suite for Educationというのは、聞いたことがある方もあると思いますけれども、多分ほとんどの方は知らないかなというふうに思います、特に中身については。これは何かといいますと、グーグルという会社が無料で提供している、これは教育機関に限って無料ということで、ビジネスの利用では有料になっております。それを教育機関は無料で使わせていただける、そういうオンライン教育支援ツールというものになります。

それで、Google Classroomというツールを使いまして、主にオンライン上に仮想のクラスルームをつかって、そのクラスルームに教師とか児童・生徒が参加をして、コミュニケーションを取ったりとか、課題の作成、配付、回収、採点などもできるという、そういうツールになっております。

導入実績としましては、日本におきましては広島県、奈良県、神奈川県、ここは県を挙げて国公立の児童・生徒全てにアカウントを配付しております。これは県の主導でやっております。それから、姫路市といったような市単位でやっているところもあります。輪之内町も全児童・

生徒、それから教職員にアカウントを配付しました。全世界でいきますと1億2,000万ユーザー、これは昨年の6月のデータですので、今はもっと増えていると思います。それぐらい有名なツールになっています。

オンライン学習といいますと、大きく分けて2つの形式がありまして、1つは同期型、もう一つが非同期型というものです。同期型というのは、子供たちと同じ時間に、例えばテレビ会議などでリアルタイムに行う、そういうようなものが同期型のオンライン学習、Zoomなどが主なものです。それに対しまして非同期型というのは、オンデマンド型で、使いたい子が使いたいだけ自分のペースで学習するという、そういうようなものです。そのためのツールの代表としてG-Suite for Educationがあります。オンライン学習は、これらの同期型・非同期型を組み合わせるやっっていくというのが現実的な使い方であろうというふうに思います。

活用場面ということで、具体的にはまだ先行事例が少なく、輪之内は非常に先行的です。これから輪之内でどんどんいろいろ試してみながら、活用の仕方、様々なアイデアを出していけたらいいなというふうに考えております。

(事務局よりG-Suite for Educationの操作説明)

**○長屋教育委員会 ICT教育指導員** 今後の方向としましては、まずは先生が慣れないといけません。いろんな機能がありますので、まず先生が使えるようにするために、例えば職員会議とか、教員がクラスルームをつくって先生同士でやり取りしてみるとか、そんなようなことをすると、例えば印刷して配るという手間が省けてペーパーレスになる、印刷の時間が省けるということで、校務の効率化、働き方改革というようなことにもつながっていくというようなことがあります。

それから、今日は校長先生から研修を始めましたけれども、明日は情報教育主任が研修をします。そうやって校内で広めていただくということがあります。

あとは、今年こんなような状況ですので、なかなか集合研修ができないということなので、先生方一人一人に学んでいただきたいということで、情報研修室というホームページをつくりましたので、こちらのほうの中に、右側のサイドマークを、eラーニング職員研修というところがあるんです。このG-Suite for Educationの使い方というところをクリックしますと、こんなような形でユーチューブ上に出ている紹介動画を集めてちょっとページをつくりましたので、こういうのを見ながら先生方に自分たちで学習してほしいなというふうなページをつくりました。

ということで、まずはG-Suite for Educationについては、機能もたくさんあるし、覚えなければならぬこともいろいろあるので、だからといって完璧にできるようになってからやろうと思っておいたらいつまでたってもできませんので、初めに町長さんもおっしゃいましたけ

れども、やれるところからやってみようということで取り組んでいけたらいいなというふうに思っています。

じゃあ次に、プログラミング教育について説明をさせていただきます。

プログラミング教育というのは、今年度から小学校でも実施されています。今度の4月からは中学校でも実施というふうになっています。

プログラミング教育では、学習指導要領に例示されている小学校5年生の算数の図形を書くところ、多角形ですね、書くところとか、それから小学校6年生の理科の電気と私たちの暮らしということで、例えば効率よく電気を使うために人が近づいたら電気がつくとか、暗くなったら電気がつくというようなセンサーを利用してですね、そんなようなものの学習が例示として入っているので、必ずやらなければならない。そういうことをやりながら、プログラミング的思考とか、あるいはプログラムのよさみたいなものを学習していきます。

じゃあ、プログラム、実際どうやってやるんだろうというところですが、今ちょっと画面にありますけれども、プログラムといってもC言語とかPythonとか、そんなふうなコードを書くのではなくて、こういうような命令がいろいろ集められたブロックがあります。こういうようなブロックをこっちからこっちに移動させながら、ブロックを組み合わせてつくっていく、そんなような形になっています。

ちょっと1つ例をお示ししますと、これはプログラミングのロボット、m-b o tというロボットなんですが、これを制御するプログラムをちょっと例として書いてみましたので、ちょっと見てみてください。

まず、これを読み解いてみたいと思います。ちょっと見にくいかもしれませんが。

まず、緑の旗をクリックされたら、これはプログラムスタートの合図です。クリックされたときに、ずうっとというブロックで囲んであります。その中には、もし何々ならこれをしましょう、でなければこれをしましょうという手順が入っています。上から見てみますと、もし超音波センサー、ここに超音波センサーがついているんですけども、この超音波センサーの距離ですね、超音波センサーの値が30より小さいならば動きを止める、これが止まるということです。30センチ以内になれば止まる。だから、自動ブレーキみたいなものですね。止まります。そして、LEDを赤色に点灯させて、0.5秒間、これはストップランプがつく。それから、今度は左折する。向きを変える。だから、近づいて30センチになったらブレーキランプを光らせながら止まって向きを変えるというのが、このもし30未満になったらというところなんです。もしそうでなければ前進しましょうということです。だから、30よりも大きい場合は前進しましょう、30よりも距離が小さくなったときには止まってストップランプをつけて向きを変えるというものです。

ちょっと実際にどんなふう動くかをやってみたいと思います。

(実演を見る)

○長屋教育委員会 ICT 教育指導員 まあ、お掃除ロボットですね。こんなようなことも身の回りにプログラムを使って利用されているというようなことを学習していきます。

じゃあ、私のほうからは以上です。

○北嶋教育委員会主任指導主事 ありがとうございます。

まだそのほかにもいろいろあるんですけども、今このようなことをお話しさせていただきました。学校のほうでは、研修ももちろんしておりますけれども、実際に先生方に使ってもらいながら、いろんな活用方法について研究を深めていくと。それをまたこちらのほうで集約して、また先生方に返していくというようなことで、どんどん活用を推進していこうかなというふうに思っております。

GIGA スクールについては以上です。

○荒川参事兼総務課長 ありがとうございます。

ただいま体験かたがた説明を受けたんですが、感想を含め何か御質問等あれば。

せっかくでございますので、市橋さんから順番に。ないならないで結構です。

○市橋（肇）委員 当を得ないかもしれませんが、先生、これは、例えば進捗状況とか、個々のお子さんの達成状況というか、レベルというか、そういうもの、どんな形で把握していくのでしょうか。

○北嶋教育委員会主任指導主事 いろいろありますけれども、さっきのSKYMENUでしたら、こうやって先生がここで一覧で見えます。今誰がどこまで行っているかということで進捗状況を把握して。配付して、今度提出という機能もあります。終わったときに、先生に提出して、先生が最終的にどうだったかという評価もパソコン上でできると。後から見て評価をすることもできると、そんなこともできます。

○市橋（肇）委員 そのできる機能はいいんですけど、そのできたことをみんなをどのレベルに合わせるとか、何か平均点方式でいくのか、個々に突出してくる人は突出してくるでいいし、対応できない人は対応できないでいいというふうにしていくのか、どんなことをもってプログラミング教育というのは評価をすることかなというのがちょっと分からなかったんですけど。

○北嶋教育委員会主任指導主事 プログラミング教育についてですか。

○市橋（肇）委員 プログラミング教育でもいいですし、こういうツールを利用するものについては、達成度というか出来栄えというのをどうこれから評価し、それをどう記録し、それから今後の個々の人のレベルアップにつなげるのかということはどう出来上がっているのかどうかということを知りたかったんです。



○北嶋教育委員会主任指導主事 一人一人能力はやっぱり違いますので、やっぱりできる子はどんどん伸ばしていきたい。できない子はできない子なりに、その子が少しでも伸びていくような、そんなような形でやっぱり進めていくのが大事なかなと思っています。個別最適な学びというのがGIGAスクール構想の中でも言われているんですけども、一人一人がそれぞれの力に合った学びをしながら、一人一人が力を伸ばしていくと、そういうことにこのICTがうまく活用できたらなというところです。

○木野委員 さっきいろんなクラス編制をやると言いましたよね。

○北嶋教育委員会主任指導主事 はい。

○木野委員 幾つかのクラスを編制すると。

○北嶋教育委員会主任指導主事 はい。

○木野委員 それは、習熟度別に、例えば理科でも数学でも何でもそうなんですけど、同時並行的に習熟度別に課題を与えてやるということは可能なんですか。

○北嶋教育委員会主任指導主事 それも可能です。

○木野委員 そうすると、根本的に学校の在り方というのは変わってきますよね。今まで習熟度別にクラス編制をするというと、必ず何かの抵抗勢力が出てきて、それは駄目やとかという話になった。それは、そういう議論するまでもなく、そういう状況になってしまうということじゃないんですか。

○北嶋教育委員会主任指導主事 やはり一斉学習には一斉学習のよさもあると思うので、その辺のところはハイブリッドしていきながら、やっぱり個別で学習したほうが良いというところももちろんあると思いますし、一斉に共同でみんなで学びたいというところもあると思うので、その辺をうまく組み合わせていくというのが。

○松井教育委員会教育課調査官 今でも少人数指導はあるね。昔はホップ・ステップ・ジャンプというて、何かそれこそ習熟度別にやっていたので。

○木野委員 ICTのいわゆる操作技術という意味では非常に素晴らしいし、何でもできる感じがします。だから、その前の教育に対する考え方を皆さんきちっと整理して持っていないと、ばらばらの教育になってしまう可能性がある。それだけちょっと、楽しいなと思いつつ、ちょっと危ないなという気がしないでもないなと思って。すみません。感想だけです。

○箕浦委員 ただ、そういう複線化した授業、個々に応じた区分が大変です。こういうような仕事ができている、大体そのパターンに合わせていけばいいんですけども、教師の方が大変。今のところはやっぱり、最低限ここだけは全員同じレベルで、それ以上、例えば単元の組み方によって、ある部分は個別にやるというて、ここは一斉にやるというて、全体としてはやっぱり共通の目標が必ず出てくる、つけさせると、そういうやっぱり考えなんですけど、現実はない

かなか、やれんことはないですけど難しいです。

○木野委員 今までは落ちこぼれがないようにという最低限度について全て習熟させながらやってきました。それと同時に、ハイエンドを伸ばしていくということも同時並行的に可能だということですね。

○箕浦委員 やれますね、時間さえきちんとそれように組んでいけば。

○北嶋教育委員会主任指導主事 そうですね。

○市橋（肇）委員 何か昔ですと、ともするとどこかのスペシャリストが集合する形態としてはクラブ活動だとか、そういったものに集約してきた。例えば理科クラブだとか何とかというふうだと、エクセレントな人がそっちのほうへ向かっていくという感じで、ほかの人はやっぱり平均的なレベルというのをある程度設定して、そこに持っていくことを教育の必須レベルという感じにするんじゃないかなとは思ったんですけど。

どれがいいのかまだ分からないんですけど、どの程度使いこなせるかもまだ分からないんですけど。ただ、こういうプログラムをつくってきているメーカーは、ある程度そういう何かレベルに応じてどういうふうに教育を進めていくべきかは考えているんじゃないかなと思ったんですけど。やっぱり練習する道程が大事だけじゃなくて、プロセスが大事だけじゃなくて、やっぱりどこまで達したかということも必要なことじゃないかなと思ったんですけども。

○市橋（修）委員 基本的な質問であれなんだけど、プログラミングというのは、主要5教科みたいに先生が評価して点数を個人的につけていくんですか、具体的に。

○北嶋教育委員会主任指導主事 いいえ。

○市橋（修）委員 そういうことじゃない。

○北嶋教育委員会主任指導主事 はい。小学校のプログラミング教育は、あくまで教科の授業の中に放り込んでプログラミングをやりましょうということなので、教科の評価はしますけど、プログラミングについては特に、子供たちに認め、励ましの評価はもちろんしますけど、していかないです。

○市橋（修）委員 分かりました。プログラミングの試験とかいってやるのかなと思って。

○北嶋教育委員会主任指導主事 中学校は技術の授業の中でプログラミングというのはあります。

○市橋（修）委員 やっぱり評価はしていくと。分かりました。ちょっとそれ、基本的なこと。じゃあ、ちょっと安心しました。

○田中委員 ちょっと話をずらして悪いんですけど、この間恵方巻を買って、うちのかみさんがいろんな断面のやつを作りよった。小学校3年生の孫が、このくらいの紙にこうやってその絵を描きよって、これこれで1個5円、10円とこうやってやって、メニューみたいなのをづくりよる。こいつを与えたら喜んでやるやろうなと思って、それをみんなでこうやって手をたたい

てやると、さっきの話で、どこまで伸びていくか分からへんわな。面白いなと思って。

だけど、先生方があっちもやってこっちもやらないと、どうやってこうやって鶴匠のようにコントロールするかなと思うけど、今話を聞いておると大分厳しいみたいやな。

○荒川参事兼総務課長 町長、そのほかはよろしいですか。

○木野委員 また話が長くなるといかんので。

ただ1つだけ、さっきのプログラミング教育の中身というのは、言語で書くんじゃなくて、要は論理性を組み合わせていくということがプログラミングの中身ですか。

○北嶋教育委員会主任指導主事 そうですね。

○木野委員 今でいうと、いろんなピースを組み合わせて、それでもって、もし何ならばという仮定法でやっていって、それがうまくトータルとして組み上がったものが今動いたものになっていますよね。でも、本当に技術的興味があるとするならば、そのブロックの中身をどう書いていってという部分がプログラミングの中身かと思ったら違うんやね、今やろうとしているプログラミングというのは。分かりました。いや、何で言語も分からんのにプログラミングなんてできんでしょ。その部分じゃないんやね。

○北嶋教育委員会主任指導主事 そうですね。論理的な思考を鍛えながら、あとはいろんな世の中にある電化製品でも、やっぱりプログラムされているから予約ができるとか、勝手に水が出るとか、そういう仕組みに気づかせていって、興味を持たせていくと。そういうのも大きな狙いのうちの一つでもありますね。

○木野委員 分かりました。

○荒川参事兼総務課長 そのほかよろしいですか。

○田中委員 面白いので、一遍いろんな先生とやってみるだな。それからまた考えやあ。

○北嶋教育委員会主任指導主事 はい。

○田中委員 だけど、今から方針なんて立てられへんと思うので、やってみるだわな。子供にやらせてみるともっと面白い、今のうちの孫やないけど、やらせてみるととんでもないことをやり出すで、そいつを上手に育てるだな。

○荒川参事兼総務課長 これは今本当に始まったというか、準備大変だったと思います。だけど、ここまでようやく準備された、その御苦労というか、大変だったと思いますけど、これからまたよろしくお願いします。

○田中委員 本当に御苦労やった。まだこれから続く。

○荒川参事兼総務課長 じゃあ、次に行っていていいですか。時間も押していますので。

(2)番、中学生防災士資格取得者の地域自主防災組織への参画の仕組みについてということで、これは行政側から、いつも課題としては教育委員会さんのあれを行政側がお聞きするとい

うパターンが今まででしたけど、教育という媒体を通じて、行政側がいろいろと課題を持っておることもこの場で情報共有しながら、課題解決できるものについては、こういう会議の場を利用していただいてやっていけたらなという思いから、危機管理課のほうから、中学生の防災士さん、お世話になっておるんですが、ということで、今日はあくまでも問題提起というか、解決云々はとてもやないけど無理なんで、今日はこういう課題を考えています。ひいては、今、点でしかないものをいかに線としてつなげるかという方策を今後考えていきたいと思っておりますので、まずはその入り口ということで御理解いただければと思います。

今現在どういう危機管理課では活動をしているかということ、防災士関係資料というのをはしよって説明します。

まず1ページ目は、皆さん御存じのように、防災に関しては、自助・共助・公助の連携でございます。その中で、特に今年、防災、行政のほうでは共助の部分で、自分たちのまちは自分たちで守る、自主防災組織というのにターゲットを絞って展開をしております。

1枚めくっていただいて2ページ目、これはイメージ図で組織の関わりでございますが、共助の部分として自主防災組織があり、そして防災士連絡協議会があり、自衛水防隊があると。これは全て輪之内町の組織ですからね。公助の国・県は別ですけど、この中にあるのは全て輪之内の組織です。

3ページ、共助の自主防災組織というのは、重要性ということで、御案内のように平成7年に発生した阪神淡路大震災、26年前でございますが、家屋の倒壊などにより生き埋めや閉じ込められた人のうち、いわゆる公的機関によって助け出された人は僅か2%。多くの方は自力、または家族や隣人などの地域住民によって救出されたという事実がございます。

その次、4ページへ行って、いわゆる公助は、いざ大災害が発生したら公的機関による対応というのはすぐには対応できないということが阪神淡路のときにもう周知の事実となりました。そこで、住民一人一人が、自分たちの地域は自分たちで守るという共助の取組が必要となるということで、地域単位の自主防災活動が求められるということで、これらの役割を担う組織が自主防災組織ということになります。

それで、一つの事例なんですけど、阪神淡路のときに、淡路島の北淡町ってありますね。今、有名な断層ができた、記念館もあるところなんですけど、あそこ、たしか輪之内町よりちょっと人口が多い町だったと思いますけれども、それが発災してから、おおよそ24時間経過するちょっと前に自衛隊が入ったそうです。兵庫県知事の要請によって自衛隊がそこへ入った。

驚くべきことに、その時点で北淡町の住民の安否確認は全て自分たちで終えていたということがありました。もちろん亡くなった方も見えます。けれども、そういったことができたということですね。それはやっぱり地域のつながりが強かった、自主防災意識が強かったという裏

返しです。

具体的にどういうことかという、例えば事前に自主防災組織で、いざ何かあったときにはここへ集まってくれという一時避難所というところがあるんですが、そこに来ていない人がいると。周りの近所の人「おい、ちょっと見てこい」とか行って、やっぱり近所のつながりが強いもので、玄関から「誰々さん」とか行って入っていかないんです。もうあの人はここに寝ておるといことは分かっていますから、もうすぐ裏手に回って、そこから探し始める。だから、そういったことで非常にスピーディーに解決したと言っていました。それで、具体的に特別な道具があったわけではありません。車のジャッキを持ってきて、家から、そして柱にかませて上げて、それで下敷きになっておる人を助け出したという事例がほとんどです。そういったことがあるので、やっぱり自主防災組織の活動は重要であるということでございます。

輪之内町の自主防災組織というのもありますけれども、5ページ。これは一応25区に配備してあります。機能しておるかどうかが非常に疑問というか、温度差があつてなかなかあれなんですけど、そういうふうにはやっています。

6ページに、活動内容を掲げてあります。日常の活動例、災害時の活動例。

7ページ、自主防災組織による訓練ということで、従来の防災訓練、各小学校でやっているんですけど、あれはやっぱり我々が思ったのは、役場が防災訓練の企画運営、やるんですけど、住民の皆さんはあくまで参加者なんですかと。いわゆる訓練がイベント化してしまっているという嫌いがありました。やっぱり9月1日に一番近い日曜日にサイレンが鳴って、各家から1人は出ていってくれという区長さんの依頼で近くの広場、お宮、そういったところへ集まって、お茶を1本もらって、そして役場の職員の話聞いて、そして帰ってくると。これが果たして防災訓練なのかということで、今年から、自主防災組織が中心となり、自分たちの地区で今何が必要かを考えて、実行し、検証するというところで展開をしてもらっています。そこには、各地域に防災士の方が見えますので、役場とかの職員等も参加させていただいて、自分たちの課題に適した防災訓練を自分たちで検討し、実施すると。これは最終形なんですけど、そこから見える課題等を整理し、地区防災計画を策定するということです。

今年も区長さんたちにこういうことでやりたいということで御理解をいただきまして、9月以降、コロナ禍、多少落ち着き始めた頃だったんですけど、各区長さんをお願いをして、今現在までに25区のうち15区、その区の中で組織としては17組織について訓練はやっていただいております。残念ながら、コロナ禍ですので、5つの区長さんはやっぱりコロナ禍で人が集まることはちょっと理解をしてもらえないので今年は中止させてもらいたいという申出があつて、それはもちろん結構でございますということで、今現在展開をさせていただいております。

その例なんですけど、8ページ、9ページに御近所防災訓練のメニューということで、こうい

った訓練をやるのも一つだよということで、これ実は北方町の例です。北方町も各地区でこういったことをやっていますよというふうなんです、この体制をつくり上げるのに5年かかったそうです。みんなに浸透させて、ここまで持ってきたのは5年かかったそうです。輪之内町も今現在、今年から取組を始めましたけれども、先ほどのGIGAスクールの話じゃないですけど、できることからこつこつと積み上げていきたいな、そしてひいてはやっぱり防災は自分のことだということのを何とか意識を持っていただきたいなということで展開しております。

次に10ページ、ここからが話なんです、まず別紙で用意させていただいた今現在の防災士のデータなんです、今日現在、輪之内町の防災士取得者は261名でございます。内訳は、こういった内訳になっています。中学生の方が、平成30年度から防災士の資格を取っていただく防災士教育というのをやっておるんですが、現在までに取得者は109名で、資格取得者の経過ということで、今3年目ですね。今年は3月にやるということでやっております。これ、足してもらおうと110名で、上の109名と合わないですけれども、1人どうも転出されたというようなことでございます。

これで、こちらの資料に戻っていただいて10ページに、防災士とはということで、防災士機構が認証した人で、基本理念としてはこの3つ。28年・29年度で防災士養成講座を大々的にやって、輪之内町では170名の方が防災士として認定されたということですね。

そこでちょっとタイムラグがありまして、11ページですね、防災士の資格は取ったものの防災士として何をしたらいいのか分からない、防災士としての役割が不明確、活躍やスキルアップの場がないということが懸案でずっとありました。それで、今年になって防災士の組織化を行いました。

それが12ページ、連絡協議会というのを令和2年7月21日に立ち上げました。設置目的はここに書いてあるとおりなんです、活動内容としては、先ほどの自主防災組織、防災隊への訓練の支援、町の主催による防災に関する事業の支援、防災士の資質向上ということで勉強会ですね、自らの。防災士相互の地域との連携ということで、例えば隣の集落のほうにそういう訓練があったらお手伝いに行くとか、そういったことでございます。協議会への参加、立ち上げて参画していただける人を募ったところ、発足当時は27人でしたが、1月1日現在までに41名に増えております。

あとは総会の様子を13ページに載せさせていただきましたが、そういうことで、今年から今そういうふうに取り組んでおります。

そこで、せっかく今、中学生の30年度に取得された方がもう卒業して高校1年生になっています。しかし、今まで何の活躍の場もなかった、こちらも提供できなかった。やっぱりせっかく中学校2年生で取っていただいておりますので、防災教育という観点から見ても、この時期にこ

ういうことをやるというのは非常に私は有意義、すごい貴重な体験だと思っています。これをどうつなげるかが今後の課題と。いきなり、やっぱり大人ではないので、例えば地元の自主防災隊の訓練に行って講師をやってくれとか、それはとてもじゃないけれども無理だと思うので、そこまでこちらも望みませんが、やっぱりせっかく取っていただいたスキルなので、何とかこの協議会に加盟していただいて、お互いにスキルアップして、地域に参画できる仕組みをつくれなかなというのが今私どもの大きな課題でございますので、そういったことを今日は知っていただくというのと、先ほど言いましたように、今2年生で勉強して結果として資格があるというような点が、今後線になって、そうしてやっぱり将来輪之内から離れていく子もいますけれども、やっぱり輪之内にとどまる子も相当数見えると思います。その子がやっぱりその年代になったときに、防災というカテゴリーにおいて中心的な役割を担っていただきたいという思いから、今日こういったことを提案させていただきました。

そういうことで、皆さんの御意見をいただければありがたいと思います。

**○田中委員** いつの間にやら始めたんやね。教育委員会でこういう議論した覚えはないんです。予算で出ておったかもしれんけど、したことはないんです。一遍ちゃんと教育委員会としての意見をつくらなあかんなど。

それからもう一つは、輪之内町という、今は地震とかいろいろあるけど、昔でいうと水害というのは非常に大きなものに見舞われている町が、こういうことをやるというのは、まちおこしとしては非常にいいと思うんやね。それから、今この時代やと、輪之内町をオール日本、世界にアピールする手段としては中学生にやらせるのに非常にいいんやね、役場的には。それは大いにやればいいと。

でも、教育として子供さんが育っていくときに、ひょっとしたら30歳ぐらいではニューヨークのウオールストリートか何かで活躍しておるかもしれん、シンガポールのマーライオンの後ろで活躍しておるかもしれん子になっていくわけね。その人たちを育てる教育委員としては、その子たちにも何らかのプラスになることを考えてやらないといけないです、輪之内のまちおこしではなくて。それは役場のほうで考えてもらうとして。

教育委員会としては、これをやることによって子供が、将来活躍するということを、多分これは作文でいいと思うんやね。一遍作文をつくらんと、課長がつくるんやけど、一遍つくらんと、何をやっておると言われるといかんで。教育というのは、悪いけどね、昔からいうと環境、小学生にやらせよ、男女共同参画、小学生にやらせよというて、みんな押しつけてきたわけね。でも、これはここだけの話でいいので、輪之内町のをつくっておかなあかん。

それから、場当たりでこうやって入れられると、いいことを入れるんだけど、輪之内町の教育理念がある。4校の理念を集めてきて教育長がつくられる。あれの中に防災というのは入っ

ておるかなど。聞いたかもしれんけど、印象にないんだわ。あそこに入れておかんと、あるいは行政でいくと何とかかんとか基本計画とか、輪之内町総合計画とか5か年計画のところに入れるわね。ああいうのにちょっと位置づけしておかんといかんなあと。活躍のほうはまた、僕はその立場ではないので、また別の機会に考えるとして、教育委員会としてはそういうちょっと、後づけの論理ですけど、事務的な論理ですけど、やっておかないといかんかなど。

そうすると、これはネタとして非常にいいネタなので、全国に輪之内をアピールするには、町長さんがどこかで全国大会で報告するとか、教育長がユニークな教育とかいうので県大会か何かで発表してくるには非常にいいことだし、それから輪之内町としては、今は輪之内町は団結がいいですけど、農業がこの状況やと、農業の後継者ほとんどいないですね。営農組合をつくっても僕の同級生ぐらいがオペレーターをやるような状況だから、そうするとばらばらになっていくんやね。今、農業があるから輪之内は成っておるけど、僕らの世代がやすらぎ苑へ行ったりするときには、ばらばらになるわね。全部大垣へ働きに行くか、名古屋へ働きに行くことになるので、その上にくっくっつけるのには非常にいいツールですね。やるのはやぶさかでないです。

こういうことでもやらんと輪之内町は一つにならへんの、ばらばらになっていくので、住宅街でしかないの、輪之内。岐阜市のほうが農業盛んだがね。そのときに、くっつける材料としては非常にいいなあと。しつこく言うようですけど、例えばほとんどの祭り、もうみんな火が消えかかっておる。そのときに一つのツールとしては非常にいいなあとという感じがしました。前回、昨日、おととい、教育委員会でこの議題だという話やで考えたのは。

○荒川参事兼総務課長 ありがとうございます。

○市橋（肇）委員 自分も少し意見を言わせていただきたいんですけど、一番最初に田中委員がおっしゃった、教育委員会としてこういういろんな問題に対してどう取り組むかとうことを必ず見解をつくったり方針をつくったりして取り組むことというのはぜひ今後もずっと続けていきたいし、今回こういう提案があったことは、やっぱり真摯に捉えて、一度教育委員同士でも話し合いをしたいと思っています。

私個人の今の意見なんですけど、この問題に対しての、今コロナ禍がありまして、教育という形からすると、今やっぱり利己主義というか、自分さえよければという意識というのがすごく強くて、今までの私たちが受けてきた教育というのは利他主義というか、みんなのために、みんながよければということを経理観をはじめとして持っていたような感じがするんですよ。

昨今の情勢の中で、コミュニティ・スクールというのがあります。学校を中心に運営していく場合に、地域の協力も得ながらやっていくと。それは、地域からだけが貢献してもらわなき



ゃいけないということよりも、学校側としても地域に歩み寄るべき、双方向の活動だと思っ  
てですね。

そういったときに、教育の中学校2年生というところで防災士という講座を受けて、それな  
りの素養をつけたというのは一体何のためかということ、この前もちょっと僕言ったりなんか  
したんですけど、そこの原点はちゃんと踏まえていかなきゃいけない。そういう素養を持った  
人たちが行政が活用しない手はないと思う、逆に。それから、そういう素養を持った人が活躍  
できる場、スキルを示す場をちゃんと発揮できる機会を得させてもらえるということは、主体  
的に考えれば非常にありがたいことだろうというふうに僕は思います。個人的な意見ですから。

ただ、これからもそういう意味で、いろんな教育の行政において教育を運営していくときに、  
やっぱりこれが行く行くはどうつながるのか、ただ単に知識とか、グローバル人材を育てたい  
というお国の意思も当然ありましよう、それからノーベル賞を取る人たちも大変必要でしょう。  
それもあります、地域に貢献するという場が、どんな立場、どんなスキルを持って地域に貢  
献するかというのは個々人だと思うんです。みんなが同じところで、同じ土俵で活躍する、そ  
うとは限らないし、やっぱり持てるところで基本的に生きている場をきちんとやっていく、そ  
れに貢献していくということは人間として当たり前の話だと僕は思いますので、大いにこうい  
うのは一体となって進めていくほうがいいんじゃないかな。そういう議論をもちろん田中委員  
の意見も聞きながら煮詰めたい。今、単純に僕は個人的な意見を言っただけで、いろんな立場  
でいろんな人がいろいろ活躍できる、そんな社会ができたらいんじゃないかなと、多様性が  
あればいいというふうに僕は思っています。

○荒川参事兼総務課長 ありがとうございます。

○市橋（修）委員 今、田中委員や市橋肇委員が言われたように、非常に感銘、共感しておりま  
す。そういう議論が足を引っ張らないように、少しでも助けになるように、僕もやっていき  
たいですね。よろしくをお願いします。

○荒川参事兼総務課長 ありがとうございます。

○浅野委員 皆さんと一緒にです。

○荒川参事兼総務課長 町長、意見ございますか。

○木野委員 まず、何で今日の場に防災士をわざわざテーマとして持ち出したんだという、そも  
そも論があると思うんです。基本的に個人個人というのは地域社会を構成する一つの重要な  
要素ですから、そこに意思というものがなかったら単なるお客さんですね。地域社会をつくる  
ということは、それぞれの個性が意思を持って参加することによってコミュニティーができて、  
そこに生活があって、それがなければ地域発展なんていうものは言ってみれば単なるお題目に  
すぎないと思っております。

そもそも一般の町民の皆さんを対象に防災士の講座をやったときもそうですし、それから途中である一定程度の成果を前提にして中学生の防災士養成講座にシフトしたのもそうなんですけれども、結局各年代において主体的に動ける人材をどう育成するかということに尽きたわけですね。

何でそういう話になるかという、さっき荒川参事のほうから言いましたけれども、一番端的に思ったのは、防災訓練をやっても結局客体であって主体じゃないんですよ。防災訓練って主体になって参加しないと意味がないんですよ。さっきいみじくも言ったけど、お茶のペットボトルだけもらって、今日の日当はペットボトル1本かといって帰っていかれたんじゃ何のためにやっておるのか分からないという話になるので、そうじゃなくて、地域のために何ができるかということが常にどこかでないと意味がないなと。そういう意味で、じゃあせつかく養成した防災士の能力を生かしていこうと。客体じゃなくて主体であるということと、もう一つ、地域の中の立ち位置を自分たちはどう考えておるか。中学生であることに意味はない。それを考えたときに、将来を担う大人であるのと、中学のときに何かできるということを自分たちで考える必要があると。知識なんて与えれば受け止める能力はみんなあると思う。でも、そうやって受動的にやっているだけでは次につながってこないということなので、今は中学生でも将来は地域の構成員として重要な役割を持ってくるわけだから、そこをどうつないでいくかということを考えていく必要がある。

僕は、正直言って、ここで生まれた人の半分ぐらいは外へ行っていますよ。いいんですよ。ここで得られた知識、経験ってやつは、よその地域でも絶対マイナスにはならない、プラスになる、そう思っているんで、うちはそういう人材を育てるなら育てればいいんですよ。そのためにはお金がかかったって、それは別に全然無駄やとは思っていない。そういうものも含めて、こことして何をやっていくかということなんです。

そこをやっぱりもう一回考え直すという意味で、別に防災士をやって、災害に対するいろんな知識・経験をやって、その次に出てくるのはやっぱり消防団に入らなあかんなどって、そんなさもしいことは言いません。そのためにやっているんじゃないですから。でも、結果的にそうなれば、それは非常にうれしい話だなと思います。それは反射的に出てくるだけの話であって、そのためにやっておるわけではない。

だから、さっき位置づけという話を田中委員されましたけれども、やっぱりどうあるべきかという議論はきちっと固めておくべきだと私も思うし、そういうことを期待しながら今日多分問題提起していると思うので、今日何かの結論が欲しいとか、そういうわけではない。

○田中委員 続きみたいなことを言っていかなですけど、教育委員の中で教育として子供を育てるという意味の防災士はどういう位置づけかという話を一遍議論しよう。

それはそれとして、参事さんのほうの話としては、輪之内町として防災をどう考えるかというのをやっぱり広く議論をやらんと、多分輪之内の役場のやり方は、名簿があって、手紙を出して、何月何日にこれをやりますよ、来てくださいじゃなくて、巻き込むような議論を公開みたいな形でやっていかんと、その気になってこうへんね。それはそのうち考えてもらうとして。

それからもう一つ、言いそびれたんですけど、輪之内中学校に同窓会ってあるんですよ。僕、五、六年会長をやらせてもらった。同窓会なんですけど、名前だけで、本当は評議員会なんですよ。評議員会の、多分新制中学校ができたときに、卒業生でない人を各村から1人か2人ずつ出してきて今の組織をつくった。だから、卒業生で必ずしもないんですよ。卒業生が出ていくと、ぱらぱらになるんですよ。我が母校、高校も大学も1人ずつっておる。大学は会費まで取っておる、卒業生から。必ず通信が来る、雑誌みたいなやつが。それでアイデンティティーとなる。

でも、輪之内の場合はないんですよ。外へ行ったら、最近履歴書のところへ中学校を書かない高校から書くのでええんかもしれんけど、アイデンティティーがなくなっていくので、例えば同窓会の通信みたいな、はがき1本でも1年に1回来ると、私は輪之内から出たんやなという認識ができるがね。1つの方法は、防災士通信とかいって、はがき1枚でいいので、今年郷土ではこういうことをやりました。ニューヨークにお住まいでしょうけど、こういうふうですと。北海道網走市にお住まいでしょうけど、こういうふうですというのが来るとかね。防災士通信とか、例えばやよ。

それからもう一つ、残念やなと思うのは、この間の火事的时候に、やっぱり輪之内にも常備消防を持たなあかんわなというのが出てくるんよ。僕が消防団のときほんの3人のやった。あのときに考えたのは、輪之内の火事は消防団が消すんやなと思った。

それから、僕、勤めが岐阜市やったんで、深く思ったのが、やっぱり消防団が消すんですよ。あのくらい大きくなると指揮系統ができへんで、42万人おると。それで、今は消防署が指揮系統を持って、消防団はPRというか、ここでいうと自主消防か、大藪やと消防団のOBが20年ぐらいやるがな、自治消防か、あの活動をやっているだけですけど。でも、山のほうへ行くと親子でやるんやね。何でかというたら、山火事は消防団、山火事対応にすると物すごい人海戦術でやるんやってね。そうすると団結も強くなるわね。

でも、輪之内はそこまでではないけれど、団体活動がだんだんなくなっていくんやね。昔の社会人野球もなくなってくるし、ママさんバレーもなくなっていくと、何もあらへんでね。

でも、教育委員会としては、生涯学習として考えたときに、輪之内町を一つにするのは生涯学習しかないような気がするんよ。踊りでもいいよ、祭りでもいいよ、ああいう何か一緒にみんなのでやることがないと、ぱらぱらになっていってしまうので。でも、教育委員会の活動はど

らんどん学校教育委員会になっていくので、ちょっと置いておいて、こっちのほうで考えてもらうとして、よそのことに口を出して言うと、そういう、またこんなことを言う人がおるんやなと思って、火事のとくに思った。

町長さんの話を途中で取ってしまって申し訳ございません。

○木野委員 いえいえ、どうぞ御自由に。

○荒川参事兼総務課長 この防災士の関係は、まず自治防災組織を強化しようとやっぱり思ったのは、誤解を恐れずに言うならば、普通我々は、役場職員がいざとなったら家庭をほかっておいてでもやっぱり出てくる。そのときに、じゃあ役場の職員100名弱、九十何名で今の人口9,600人のいざ災害があったときにかゆいところまで手が届くかというたら、1人当たり職員で見れば100人の面倒を見させてもらうということ。とてもじゃないけど、その一人一人のかゆいところまで手が届くというのは、はっきり言って無理です。だから、いざそうなったときに、やっぱり自分たちのことは自分たちでお願いしたいというのもあるんですね、側面として。

だから、そういった意味で、今年、区長会で私何回も言いましたけど、いざ大災害が起きたときに、例えば地区の一時避難所に集まる、そのときに皆さん言いますよ、区長、俺らどうすればいい、これからどこに逃げればいい、飯はどこにあるんやと必ず言いますよ。そのとき、区長さん、答えられますか。だから、そうならないために、区長さんたちも仲間をつくりましょうよ。せめて自分たち、今年の役員さんに、こういうことが起きたらこういうことが必要だと、絶対区民が言うてくるので、どうしようねという話合いぐらいはしましよというところから始めた。

それで、今年になって11月でしたかね、東日本大震災で実際に被災された仙台の自治会長をお呼びして、その人に、語り部というか、ということでやりました。そのときに区長さんたちはいろいろ質問されました。やっぱりほとんどリアルタイム、聞いて、その中で、それを機会に、あと訓練をやってくださいということをお願いしますということと言ったら、先ほど言いましたけど、15区、17組織で今日までに展開をしていただいたという経緯がありました。

ということで、今までのそういった経過をたどっておるよということですね。

先ほど言われた防災士通信とか云々、これはやっぱりこれから展開していくといいね。

それで、今年1月17日に、阪神淡路の記念日に、防災士の勉強会をやらましようということで段取りしておったんですけど、ちょうどコロナがまた増えてきたもんで、講師もちょっとよう行かんという話だったんで、分かりましたということで、急遽延期にしたんですけど、そういったことでやっています。

○田中委員 荒川さんのやれる範囲のことを提案するんですけど、教育委員会に輪之内町のハザードマップか、どこにどれだけ水がつくとか、何日間水がついておるとか書いてあるじゃん、

貼ってあった。

○荒川参事兼総務課長 はい。

○田中委員 あれを見ておると、全部つくんやね。

○荒川参事兼総務課長 そうです。

○田中委員 全部つく、それはこういう地理的条件だからしょうがない。

そのときにどう手を打つかというのを、役場は参事がこの辺に入っておるよじゃなくて、町民と共有するとか、例えば明治29年か、濃尾震災の次の年に大垣城まで水についておるんやね。僕もおばあちゃんから聞いておるのは、大樽川の堤防で見ておったら、川が流れてきてと、大樽川の堤防まで見えたんやなど。まだ大樽川の堤防を閉め切ってあらへんときやでね、三川分流の前やでと思うんやけど、そのときに昔の話でいうと助命壇とかいうのを町長さんがつくってくださったやん、あそこのところにな。でも、大藪から行くの遠いじゃん。というのを仮想で、例えば大藪の人は東大藪の堤防まで逃げろとか、ここら辺のところ逃げたらええという想定とか、何かあってもええと思うんやわ。あれ、貼ってあるだけで、不安になるだけじゃん。例えばうちの実家に帰ったら、100メートルも行けばどこどこ、例えば昔やと小学校は高いとかいうのがあるんやけど、あらへんもんで、あれ、非常に不安になるわ、教育長のところに貼ってあるやつね。

○荒川参事兼総務課長 あれは、ハザードマップの前に、水防の避難所も一時避難所というのも決めてあるんです。それはやっぱり昔の人の知恵で、水がついたらここへ集まろう、つけかけたらここへ逃げよう、大体堤防ですわ、というふうになっておりますけど、果たしてそれを今町民の方がみんな知っておるかという、非常に・・・ですね。

私、最初、水防関係のハザードマップを担当でつくって全戸配付させてもらったんですけど、1か月後には廃品回収に出ていましたからね。

○田中委員 町報は1日になる前に出るという話だよ。

○荒川参事兼総務課長 だから、その当時意識が低かった。

昨今、やっぱりこれだけのゲリラ豪雨とかあれで風水害が非常にクローズアップされてきましたね。それで、やっぱり今となって輪之内町もいろいろなところから御質問はいただきます。その対策もいろいろと、今、大樽新田のほうに防災拠点をつくっていますけれども、そのほかにやっぱりもっと考えないかん部分、広域避難とか、そういうことも今考えていますし、他市町に呼びかけて応援協定ということもしかけています。

それで、何が言いたいかという、これも誤解を恐れずに言うならば、この地形で昔から水の脅威というのはあった。なぜ今になってそんなにクローズアップするのかというたら、今まで結局平和過ぎたんです。だから、よく声を荒げて「どうするんや」というて詰め寄ってみえ

る方も見えますけど、ちょっと待てと、今、最近にこの地形ができたんですかとこっちが聞きたいですけど、そこは言うといけないかになってしまうので、ぐっところえて今考えていますというふうにやっています。

だけど、本来はやっぱり住民の人も、そういうことを自らの身でどうしたらいいんだろうということを考えてもらいたいという意味で、こういう地域に根差した活動をやっていく。その中で、やっぱり将来、せっかく中学校でそういう防災の勉強をした子たちが、そういったことをツールにして地域への参加とか貢献とか、そういうことにつながっていけばいいなというのが最終的なひいての目標という位置づけです。

○**箕浦委員** 私、何年か指導員をやらせてもらいました。私、中学校のときにやりました。将来地域で活躍していく子供たちを送り出しますので、どうやって育てるか。いろんな事業とか活動が地域でありますので、子供たちがまず参加することやと。参加することによって人と人がつながっていくので、それが一番の基本ですので、一緒になってやると次回も参加しようとする気持ちが育ちます。そういうことをやっぱり大事にしていかなと、頭だけでっかくなってしまうと、全然気づかんようなことも困りますので、そんなことを私思っずうっとやってきました。それが一番の基本だと思います。

○**荒川参事兼総務課長** ありがとうございます。

○**市橋（肇）委員** すみません。個人的な意見ですけど、先ほどお話があった火災なんですけど、火事があった後、私の地区でも火災が起きました、すぐに。

そのときに、5ページにあるような自主防災隊の組織図、私は副区長という立場でおりましたので、区長のところに連絡を受けてさっへ行ったりなんかしましたけど、そのときにいろんな班があるということもこれあるんですけど、ただ近隣の人たちなり、いろんな本当の直近の人たちは、それなりの消火活動から始まって避難活動とかをやるんですけど、組織立った動きというのはなかなかできていない。

それから、西の地区で火災があったんですけど、北の地区の人たちというのは、西で起きていてもあまり我関せずみたいなところがあって、要は何でかという、区だといっいても当事者意識に欠けるな。ましてや火事なんていうものは、村八分でも火事は付き合うんだ。それなのに当事者意識が欠けているのは一体何なんだ。

それから、その組織が組織的に動けない、見識が積まれていない、防災士の知識だけじゃなくて、経験が積まれていないから、それをどう生かすのかというところまで行っているか、行っていないんじゃないのか。防災士がじゃないですよ。時たま区長が防災士を持っておったんで。

ただ、ああいうときになると、僕はやっぱり長老だとか、経験者とか、昔からいる人の知恵

が欲しいなというようなことをちょっと思ったんです。輪之内というところは、地政学的にいても、必ずですけど、治水との闘いというのはずうっとある。岐阜県というのは、飛山濃水と言われるくらい治山治水の歴史だと思うんですよ。その治山治水にたけた人が大体政治的にもリーダーをやってきているんですよ。だから、公にみんなでいるときに素養をいろいろ積んでいく、いろいろな人となりの人たちがこれからもやらなきゃいけないとか、教育長がさっき一緒にやる、これが大事だよと。一緒にやるということは何だ、当事者意識を持つ、主体性を持つとか、いろんなことがあるんですけど、要は自分のこととして考えられているかどうか問題だろうと思います。

いわゆるいろんな知識をつけるというのは、いつか役に立つということを前提にやっているんだと僕は思いますので、当然のようにこの組織図とかいろんなものも見直しするし、地域の活動においても、高校1年生ぐらいになられた人というのはもうかなりの大人と見ていいと思うんですよ。だんだん低年齢化していると思います。だから、そういう人たちの力も、それでいろんな世代があるから、世代間ギャップを生まないように、今地域の活動においては世代のギャップがあって、縦糸があまりないように感じているんですよ、逆に。縦糸ばかり強くなり過ぎててもいかなんですけど、縦糸がとにかく欠如してきているんじゃないかなということをちょっと平日頃の区の活動においては感じます。だから、そのためにもこういう組織を見直したり、役割分担を見直したり、縦糸を強くする、横糸を強くする、常に考えていくということは必要なんじゃないかなと最近僕はつくづく思っていて、もし僕、副区長という立場で、皆さん、群盲象をなでるじゃないけど、いろんな問合せが来たときにどう動けるかといったら、自信は全くありません。以前勤めておった会社の中においては、ある程度の知識、経験があって指示も出せただろうけれども、この地域の中でどう動いていったらいいかというのはよく分かりません。まして教育なんていう大命題は大変なことだというふうに思っておりますけど。

いずれにしろ、こういう機会を通じて、行政の中の一環として教育があると僕は思っていますので、一緒になってやっていくという教育長の方針に沿って、これからも参画していきたいなと思います。

○箕浦委員 学校は将来の基礎になる力、知・徳・体、3つの観点からバランスよく育てるというのが一番の大きな目標ですので、なかなかすぐに防災という、今の防災教育でやっておることとすぐ結びつけるという、将来的には生きてくると思うんですけども、その辺りもまた考えていかないかなと思いますし、学校でいいますと、いろんな分野で心の教育をやっているわけです。合唱やったり、生徒会やったり、児童会やったり、委員会やったり、ボランティアで地域に出ていったりですね、そういういろんな活動をする中でやっぱり心が育ちます。自助とか共助とか公助とか、こういうことも育ちますので、そういう活動にどんどんと参加させると

いうことを中学校も小学校も今やっております。そういうのを一生懸命やることによって将来につながっていくと考えています。

例えば今コミュニティ・スクールとか地域学校協働活動をやっていますけれども、高校生とか大学生も学校とか地域に参加したり、指導したり、呼んだりですね、そういうような活動をどんどんとしていくと、こういうつながりもだんだんとできてくるかなと思います、これからの方向として。今コロナでなかなかそういう活動が縮小しています。何とか早くそんなような方向で進めていきたいと思っております。

それからもう一つ、防災士講座の持ち方ですが、これは学校の総合的な学習の時間で実施しています。この時間はどういうふうに意図してつくられているかという、自分たちで課題を持って調べて学習していくという、問題解決していく力をつけるという趣旨でつくられております。今、防災教育の講師さんを見ておると、説明を子供は聞いているだけ。そんな感じが多いですので、もっと子供たちが自主的に活動できて、作業して、例えばパソコンを使ったり、そういう工夫をしてもらえるとありがたい。合格率もちょっと今下がっておるんです。だから、何がその原因かと。どうも、私も時々見たことがありますけど、一方的に話されている。だから、プレゼンを使ったり、そんな工夫をしていただけるといいと思います。いろんな活動、作業とか、そういったことに取り組むと、子供たちも楽しくやれると思います。

○荒川参事兼総務課長 いえいえ、ありがとうございます。

一つ笑い話として聞いていただければいいんですけど、うちの娘が高校1年生で、ちょうど最初の平成30年度に取った生徒なんです。これをうちでしゃべっておったときに、今度大吉で自主防災組織の地元の訓練があるで来てくれよと、防災士の資格を持っておるやろうと言ったら、そんなもん行かないと言うので何でやと聞いたら、もうそんなもん全て忘れてしまっておるので分からへんと。それはまあそうやろうなど。それで、やっぱり2年生で取って、3年生で全くブランクがあって、高校生になる。それは確かにそうなる。

実際に、やっぱり中学校は2年で取って、3年生はすぐ受験になりましたので、なかなかそこで地域のことに触れてくれってなかなか難しいかもしれない。やっぱり高校生になってちょっと時間ができたときにいかに活動してもらえるかという目で考えるかな。それか、高校生、大学生とかという……。

○田中委員 会社入って、そこそ自分の仕事ができるようになって、ちょっと部下のことを思ったりするぐらい余裕が出てきたときに、ひょっとしたら10人に1人は目指してくれるかもしれない。大学生を見ておると、うちらはこういう変わったことをやってきたというのは時々自慢話をしよるわ。あそこで出してくれたら、言葉だけでええで、技能はええ、知識もいい、言葉だけでも言うてくれたら、お金をかけておるけれども、合格にしてやって。それで、子供がこ



ここに居着いて、帰ってきて居着いて、ここで子供を生かせる頃になって思い出せば御の字やで。僕、それだけでも当事者価値あると思うんですよ。

○荒川参事兼総務課長 それはそうだと思う。

○田中委員 そんなもんやて。娘さんが言うたの、それは彼女たちの1年はうちの10年やで、1年たったらがらっと変わってしまうので、頭の中。それは無理やて。取ったけどと言ってくれただけでええ、合格やて。会社へ行って、東京で活躍しておるときに、ふっと酔ったときに友達に話をしてくれたら合格。防災士、おまえら持っておらへんやろうと。わしは持っているぞと。そこやて。そのぐらいやに。

合格率はますます、荒川さん、減っていくと思うんですけど、教育委員会としては、教育長やない、僕の意見としては、やっていく方向で大いに。でも、受講する人が減っていったらいけないので、それはおたくのほうの問題としてやってもらわなあかんよ。教育委員会としては、子供にこういうことをやるということはいいことかなと思うんですけど、そのところはあとは子供が興味を持って合格してくれるように。それから、高校受験と関係ないでと彼らは思うで、2年生の終わり頃になると。これも一つの面白い高校受験の前のテーマだと。

○荒川参事兼総務課長 現実はそうですよね。

○田中委員 これは大きな問題やよ。それは頼みますわ。

○荒川参事兼総務課長 はい。

○箕浦委員 中には、そういう必要感を感じておらん生徒が正直言っておる。

○田中委員 一番最初やでな。

○箕浦委員 一番最初のところで何とかしなあかんです。

○田中委員 それは大きな問題。

○木野委員 ちょっとその必要を感じていない子供がいるというと、もう情けないの一言に尽きる。

○箕浦委員 そういう子もおるもんで。

○田中委員 だから、やる価値があるんやね。

○箕浦委員 はい。

○木野委員 だから、思うんだけど、自分の命を守ることがいつから他人の仕事になったの。自分の命って自分で守るもんじゃないの。そこから出発していないから、みんな人ごとになっちゃう。人ごとじゃないということをもう一回巻き戻して、しっかりとそこを根づかせないと、何をやって次につながりません。それはおかしい。そもそも出発点が間違っておる、その子ら。

○荒川参事兼総務課長 ちょっと長くなってしまうのであれですけど、私が最初防災教育が必要

だと言ったのは、東日本大震災の釜石市がありますよね。あそこでずうっとウオッチャーをしてきた方が見えただけですけど、その人の話を聞いたときに、皆さん、僕はあのとき初めて聞いたんだけど、釜石のあその湾ですね、あの中には今のスーパー堤防みたいな堤防が30年前に構築されておるんだそうです。それで、その当時の人たちは、もうこれで津波が来たって大丈夫というふうに思っておったそうです。

それで、そのやっぱり学生さんが一回調査で行ってみて、薄々これではちょっとということで、やっぱり地域に密着していろいろ取材をして、その方は研究者なんであれでしたけど、やっぱりみんな、お年寄りというか、ある程度の年を取った年代の方は、もう津波は大丈夫、だって堤防があるもん、あれ海の下にあるけど、あれで大丈夫だよと言い続けて、その人たちはそういうふうに言ってきた。その息子さん世代も、それを言い伝えて聞いてきた。

その方が、やっぱりこれではまずいということで、その年代の方を集めて、いや、これではまずいですよということをした。最初は聞こうとしなかった。何、東京から来た学者が言うておるんやと。俺らは俺らのことやと。という話があったんだけど、その人も、あんたら、もし津波で孫、子供、死んだらあんたらの責任やぞというふうに言った。半分脅しみたいなものです。絶対にこれ以上強い津波が来ると言っていた。それを聞いたおじいさんとか、その人たちは、もうやっぱり言わなくなったんですね。津波が来たら、今度は高いところへ逃げろと言うようになった。その学者さんがそういうふうにしてくれと言ったのもあったんですけど。

それがだんだん根づいてきて、今回、釜石市はみんな中学生が近所の保育園の子供とかお年寄りを連れて、みんなとにかく合言葉は山へ逃げろということで、後ろを振り向かずとにかく逃げた。本当にあその山の中腹まで水が来たんですけど、本当にすでのところで助かったといった。これは釜石の奇跡というNHKの番組でやっていましたけど、やっぱりそういった教育、あれが例えばずうっと誰も言わずにいたら、誰も逃げませんよ。釜石市の人みんなやられています。

だから、僕はその話を聞いたときに、そのNHKのを見たときに、ああ、やっぱり教育ってすごいなというふうに思った。だから、こういったことを思いました。

**○市橋（肇）委員** そういうよその事例を聞いて、そういう防災意識を高めたかもしれないですけど、僕は単純にですけど、僕は小学校、七、八歳の頃かな、伊勢湾台風があったんです。その後、第2室戸台風というのが来ました。

その頃の自分の感覚は、小さいですから、もう本当にこの地区、中学校なんか水に埋まったりなんかしている。それから、自分たちは親と一緒に堤防へ避難しました。その当時でリヤカーです。リヤカーに物を積んで、堤防へ避難したりしました。それで、あの揖斐川がすぐ近くまで、手が洗えるくらいまで本当に水がいっぱいになるんです、海みたいに。小さいながらで

すから、物すごいことが起きているという感覚でした。

それから、私は仁木小学校へ通うほうなので、仁木小学校へ通っていくのは、通学路は水につかっていませんけど、あとはみんな水浸しです。それから、中学校というのは低い土地ですから、水の中に浮いているような感じの学校の校舎でした。

そういうのが実体験なんです、自分にとっては。だから、それに対する思いというのは、やっぱり実体験を持っていると違う。だから、世代間ギャップが今あると思うんですよ。だから、荒川さんなんかは、あまりそういう実体験よりは人から聞いた話が恐ろしいことだとなるだろうけど、実体験を持っていると当事者意識というのを物すごく養われる。

それで、昭和51年ぐらいでしたか、安八町も切れた。私そのとき社会人になって仙台にいた。まだ入社二、三年ですから、みんなが、おまえの田舎だから何はさておいて親元へ帰れと言ってくれました。そういう会社でした。ありがたかったです。だから、そのときもこっちへ帰ってきて、どうやってアプローチして輪之内へ到着しようかと、羽島駅までは来たんですけど、その後渡ってこれない。それで、堤防、堤防、関所、関所に人がいて、なかなか通してくれない。その当時は運転免許証で本籍が書いてあったから、田舎へ帰るといふ証明にもなったので、それで通してくれたりもしたんですけど。

いずれにしろ、そういう実体験を持っていると当事者意識を持って変わってくると。それは自分の子供とかにも言うんですけど、実体験を持っていないから、全然そんなの何をたわ言を言っているというような話になっちゃうんですけど。そういう世代がだんだん今いなくなるところなので、こういう防災というものに対する考え方、これはどこでもそうですけど、会社でもそうですけど、将来への危機管理、クライシス管理として、そういったものに費用を投じるというのは、なかなか目に見えて効果が出てこないところもあるので、ともすると薄れがちになるんですけど、やっぱり僕はここへ来たときに、こうやって防災士を中学生から養成しているとか何かを感じたときにはすばらしい、やっぱりさすがに地政学的にこの土地を踏まえたリーダーたちがちゃんと将来のことを考えているなど感心しました、逆に。僕はうれしかったですね。そういうのがきちんと受け継がれていると。受け継いでいこうという意識だと。そういうことだけちょっと自分は思っていました。

○荒川参事兼総務課長 ありがとうございます。

それでは、大変長い間、慎重審議ありがとうございました。

そういうようなことで、また今後も継続な課題ということでお願いしたいと思います。

最後、その他ですけど、何か皆様方からありますか。

よろしいですか。

(挙手する者なし)

○荒川参事兼総務課長 それでは、長時間にわたりましてありがとうございました。

これで会議を閉じさせていただきます。お疲れさまでした。

(午後 9 時00分 閉会)